

セルマ・ラーゲルレーヴ『モールバック』における「脚部障碍」の表象
—優生学思想への関心を背景に

日本独文学会秋季研究大会（2011年10月15日（土） 金沢大学角間キャンパス）

発表者：中丸 禎子（東京理科大学講師）

【対象テキスト】

・ Selma Lagerlöf (1858-1940): *Mårbacka*, Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1922

・ Selma Lagerlöf: *Mårbacka. Erinnerung an meine Kindheit*, München (Langen Müller Verlag) 2008

・ ラーゲルレーヴ『モールバック ニルスの故郷』、新妻ゆり訳、柏艸舎文芸シリーズ、2005

※誤訳・事実誤認多数。なお、タイトルにあるモールバック（ヴェルムランド地方の村名）は、ラーゲルレーヴの出身地であり、『ニルスのふしぎな旅』の主人公の出身地は、スコーネ地方のヴィンメンヘーイである。

1. 研究全体の意義・見通し

1. A. 研究対象「脚部障碍」

近代ヨーロッパの「他者排除」の例として

〈研究の意義〉

日本：「牧歌的な福祉国家」という北欧のイメージ／「母性的な平和主義作家」というラーゲルレーヴのイメージ

→スウェーデン批判の端緒

スウェーデン：「スウェーデンを代表する国民的作家」「女性解放の旗手」というラーゲルレーヴのイメージ

→作家研究の新しい視点

ドイツ：「ユダヤ人と共産主義者に毒される以前の健康で素朴なゲルマン的生」を書いた民族主義作家としての受容（1890年代～ナチス時代）

→民族主義と平和主義・反ユダヤ主義の共通点と相違点

1. B. 「脚部障碍」を対象とする理由

▶ 「障碍」：優生学との関連→1. C. へ

▶ 「脚部障碍」

1) ラーゲルレーヴ自身の左脚の障碍➡『モールバック』、〈画像資料〉⑧

作品に頻出する「脚部障碍」のヴァリエーション

・寝たきりの病人：『御者』のシスター・エディット

・酩酊者（まっすぐに歩けない）：『イエスタ・ベルリングのサガ』のイエスタ、『御者』のダヴィッド

・狂人・神がかりの預言者（まっすぐに歩けない）：『エルサレム』のイエットルード、『地主屋敷の物語』のヘーデ、『ポルトガリエンの皇帝』のヤン

・放浪者（定住しない、地に脚がつかない）：『リリエクローナの家』のリリエクローナ（ラーゲルレーヴの祖父がモデル）、『ニルスのふしぎな旅』のニルス、『御者』のイエオールイ

・鍛冶屋・大工（神話・伝説の中でしばしば脚部障碍者として描かれる）：『イエスタ・ベルリングのサガ』の「貴人たち」

2) 女性と脚部麻痺＝「家への隷従」

・ヨハンナ・シュピーリ『ハイジ』（1880-81）：クララ・ゼーゼマン

- ・ルイザ・メイ・オールコット『若草物語』(1868-69)：エリザベス・マーチ (いつも座っている)
- ・エレノア・ポーター『少女ポリアンナ』(1913-15)：主人公ポリアンナ
- ・スーザン・クーリッジ『すてきなケティ』(1872)：主人公ケティ・カー

[参考] Keith, Lois: *Take Up Thy Bed and Walk: Death, Disability and Cure in Classic Fiction for Girls* 2001

3) 「山羊脚の悪魔」「杖を突いた魔女」=ヨーロッパの伝統的な「脚部障害者」
イエスと「中風の者」のエピソード (引用集) B.

▶ 「他者排除」批判 「二項対立」の相対化：「両義性」に着目

近代以前における身体障害者の「両義性」→「つまはじき者」/特殊な能力を備えた存在

- ・魔女：歩行が不自由/空を飛ぶ 忌避すべき存在/民間伝承
 - ・オーディン (北欧神話)：片目/宇宙を統べる智慧
 - ・鍛冶屋ヴェルンド (北欧神話)：脚が不自由/屈指の金細工師
 - ・鍛冶の神へパイストス (ギリシア神話)：醜い容姿、脚が不自由/芸術作品
- 「障害者」=天才、芸術家、神、神性を持つ者

1. C. 優生学思想の展開

1859年 チャールズ・ダーウィン『種の起源』：生物は自然淘汰により進化

→社会ダーウィニズム (1870年代～)：教育改革、女性解放、社会主義、公衆衛生など

1883年 フランシス・ゴルトン『人間の能力とその発達の研究』：ダーウィンの自然淘汰説を人間社会に適用、初めて「優生学」(eugenics)という言葉を用いる。

1900年 エレン・ケイ『児童の世紀』：児童福祉充実の立場から優生学を支持

1905年 ベルリンで「人種衛生学会」発足。1907年、「国際人種衛生学会」に名称変更。

1907年 アメリカ・インディアナ州で断種法制定

1909年 アメリカ・カリフォルニア州で断種法制定。1913年改正。精神病患者のほか、梅毒患者、性犯罪者を対象としたこと、実施率が高かったことが特徴。ナチスの断種法のモデル。

1909年 スtockホルムで「スウェーデン人種衛生学会」発足。「国際人種衛生学会」との結びつき
[背景] ゲルマン人種イデオロギー

1922年 デンマークで婚姻法成立。知的障害者・精神障害者の婚姻には法務大臣の許可が必要。

1922年 スウェーデン・ウップサラに「スウェーデン人種生物学研究所」設立。世界初の国立遺伝学研究所。

1929年 デンマークの断種法。性犯罪の恐れがあるとみなされた者 (同性愛者含む)、精神病患者が対象。

1933年 ドイツの断種法「遺伝病子孫予防法」(Gesetz zur Verhütung erbkranken Nachwuchses)

1934年 ノルウェーの断種法

1934年 スウェーデンの断種法「特定の精神病患者、精神薄弱者(*)、その他の精神的無能力者の不妊化に関する法律」(Lag om sterilisering av vissa sinnessjuka, sinnesslöa eller andra som lida av rubbad själsverksamhet)。1975年に廃止。(*) 原文をそのまま翻訳。

1935年 フィンランドの断種法

1940年 日本で「国民優性法」が成立 (スウェーデンを視察した永井潜らによる)

1948年 日本で「優生保護法」が成立、優生学が本格化。(ハンセン病が対象であったことが特徴。1996年、母体保護法の施行により廃止)

2. 作品解釈：セルマ・ラーゲルレーヴ『モールバック』(Selma Lagerlöf: *Mårbacka*, 1922)

2. A. ラーゲルレーヴ関連年表

1858年：ヴェルムランド地方モールバック (Mårbacka) に生まれる。

1850年代：近代化による社会の大きな変化

1882年：ストックホルムの教員養成所を受験。1885年からランスクローナの女学校で教鞭をとる。

1885年：父グスタフ・ラーゲルレーヴ死去。次兄ヨハンが家督を継ぐが、運営に失敗。

1889年：競売により、モールバックが人手に渡る。

1880年代：「80年代文学」の隆盛。多くの女性作家がデビュー。

1891年：『イエスタ・ベルリングのサガ』(*Gösta Berlings saga*) 出版。「90年代文学¹」の代表作。

1899年：『地主屋敷の物語』(*En Herrgårdssägen*)

1901年：『エルサレム 第1部』(*Jerusalem I*)。第1回ノーベル文学賞の候補となる。

1902年：『エルサレム 第2部』(*Jerusalem II*)。英語訳、ドイツ語訳など同時出版。

1906～07年：『ニルスのおしぎな旅』出版。80か国語以上に翻訳。

1907年：ウップサラ大学名誉博士号授与 (女性初)

モールバックを買い戻す。1908年～21年にかけて大規模改修工事。

1909年：ノーベル文学賞受賞 (女性初・スウェーデン人初)

1911年：ストックホルムで開催された国際女性参政権会議で演説『家庭と国家』。女性参政権の導入を主張。

1912年：『御者』(*Körkarlen*)

1914年：スウェーデン・アカデミー会員に選出 (女性初)

『ポルトガリエンの皇帝』(*Kejsarn av Portugalien*)

1910年代：「90年代」文学の終焉と「モダニズム」文学の勃興

1914年～1918年：第一次世界大戦

1918年：反戦小説『追放者』(*Bannlyst*) →低い評価

1920年代：第一次世界大戦の影響による不況・失業問題

1921年：恋人ソフィー・エルカン死去

1922年：『モールバック』(*Mårbacka*)

1925/28年：『レーヴェンシエルドの指輪』三部作

1930年：『モールバック第二部 一人の子どもの思い出』(*Ett barns memoarer. Mårbacka II*)

1932年：『モールバック第三部 セルマ・オットーリア・ロヴィーサ・ラーゲルレーヴの日記』(*Dagbok för Selma Ottilia Lovisa Lagerlöf. Mårbacka III*)

1933年：『土間で書いた話』(*Skriften på jordgolvet*) →ナチズム批判

1940年：ヴェルムランドで死去

2. B. 『モールバック』

・自伝的小説 (初めて「モールバック」、「ラーゲルレーヴ」など実在の固有名詞を出す)

[比較] 『イエスタ・ベルリングのサガ』(1891)、『ポルトガリエンの皇帝』(1914) などでは、モールバック=レーヴダーラ、ラーゲルレーヴ (祖父や父をモデルにした人物) =リリエクローナ

・三人称語り (第二部、第三部は一人称)

・3歳から12歳まで+生まれる前の伝聞

¹ 1850年代の北欧の近代化を背景に、1870年代から1880年代にかけて、自然主義的傾向を持つ「80年代 (åttitalet)」文学が興った。これに対して、1880年代末から1910年頃にかけて、政治の保守化、およびニーチェやフロイトの影響の下、反自然主義的な「90年代 (nittitalet)」文学が興った。

・構成：5つの見出しとあとがき

ストレームスタッド旅行 3歳半で歩けなくなってから4歳半で再び歩けるようになるまで

- ・乳母 ・珍しいお客様 ・カールスタッドへの旅 ・ウッデホルム号のキャビンで
- ・金細工師の店 ・灰色島 ・楽園の鳥 ・記念品

老家政婦のお話 老家政婦が子どもたちに語る、祖母の若いころの話

- ・祖母 ・ヴィラーステンスバックンの幽霊 ・ヴェンネルビーク牧師 ・雄ガチョウ
- ・レミング ・水の精 ・連隊付き書記 ・兵士たち

古い建物と昔の人たち 祖父の時代と父の時代のモールバックカの様子

- ・石造りの小屋 ・金庫 ・高床小屋 ・作男の部屋 ・女中 ・花嫁の冠
- ・ヴァッケルフェルト ・オーケストラ

新しいモールバックカ 父がモールバックカの改修を目指し、失敗

- ・17匹の猫 ・新しい家畜小屋 ・果樹園 ・屋根の骨組み

日常とお祭り 父の昔話とストレームスタッド旅行後のセルマ（12歳まで）

- ・昼寝 ・ブローストレーム嬢 ・ブロッケン山への旅 ・ベルマンの歌 ・少年たちと少女たち
- ・老兵士 ・希望の国 ・キュウリウオの季節 ・8月17日

あとがき 1919年8月17日、父の100回目の誕生日に墓参り

・主な登場人物と家族

祖母 Lisa Maria Vennervik (1784-1864)

祖父 Daniel Lagerlöf (1776- 1852) セルマ誕生時にすでに故人、昔話に登場

父 Erik Gustaf Lagerlöf (1819-1885)

母 Elisabeth Lovisa Wallroth (1827-1915)

叔母 Otiliana Lagerlöf (1822- 1911)

長兄 Karl Daniel Lagerlöf (1850-1928) 母方の祖父母の家で暮らしており、あまり登場しない

次兄 Johan Gustaf Lagerlöf (1854-1912) (後にアメリカへ移民)

姉 Anna Georgina Lagerlöf (1856-1879) (後に結婚するが、まもなく結核で死去)

Selma Ottilia Lovisa Lagerlöf (1858 -1940)

妹 Gerda Julia Elisabeth Lagerlöf (1862-1952) (第一部「珍しいお客様」で誕生。ストレームスタッドへは同行しない)

乳母 Kajsa Persdotter (Back-Kajsa, 1819-?)

〔背景〕 1920年代の不況・失業問題（第一次世界大戦の影響による）

→牧歌とノスタルジーの流行、幼少期を書いた作品の人気

- ・Stirnsted: *Ulla-Bella*, 1922
- ・Lagerkvist: *Gäst hos verkligheten*, 1925
- ・Martinson: *Nässlorna blomma*, 1930

〔受容〕

スウェーデン：これまでにない著者の「人間性」や「温かさ」を示す作品として人気、37000部発行（1920年のスウェーデン人口は5904000人）

ドイツ：「ユダヤ人と共産主義者に毒される以前の健康で素朴なゲルマン的生」

ナチズムを批判した「土間で書いた話」発禁後も『モールバックカ』は刊行

〔研究史〕

- ・著者の伝記的事実の資料

2. C. 作品解釈

①「民族主義文学」としての『モールバック』

- ・典型的な障害者排除→「打ち捨てられた不幸な片輪者になるのではなく、本当の人間になる」☛【引用 5】
「結婚できず、自活もできない」☛【引用 4】
- ・歩行能力の獲得＝認識能力・記憶能力の獲得＝文明化☛【引用 3】
↓ ↑
「野蛮な」バック・カイサ（☛【引用 6】）からの離脱
- ・書かれなかった伝記的事実
 - ラーゲルレーヴの障碍の具体的な原因・病名
 - ラーゲルレーヴの同性愛
 - 父のアルコール依存症⇔盛大な誕生会（最終章「8月17日」）☛【引用 9】
100回目の誕生日（あとがき）
 - 父の治水事業の失敗
- ▶故郷を愛し、父を尊敬する「国民作家」ラーゲルレーヴ
（ノスタルジー／民族主義との結び付き）

②ステレオタイプを超越する『モールバック』の「脚部障害者」像

- ・脱ステレオタイプの4つの可能性
 - 1) セルマ自身の障碍に対する「肯定的」評価☛【引用 1】、【引用 7】
 - 2) わがままな障碍者／治癒後→認識能力・作家
〔比較〕19世紀・20世紀の少女小説：しとやかで控えめな脚部障害者
治癒後→良き妻・良き母（家族の中心）
 - 3) 「両義性」①：脚部障碍＝楽園を飛ぶ能力
 - ・歩行能力の喪失＝バック・カイサ（180cm）の歩幅の獲得☛【引用 1】
↓ ↓
ストレームスタッド旅行（馬車、船）
「楽園」と関わる能力（「楽園」を飛ぶ翼）☛【引用 2】
脚部障害者セルマと脚のない「楽園の鳥」の親和性
 - ・ヤコブ号<ヤコブ（「創世記」）＝「かかとをつかむ者」「人を欺く者」☛（引用集）B. 参考資料
→兄弟を出し抜くセルマ・伝記的事実としての父の遺産の獲得
 - 4) 「両義性」②：「奇跡」による治癒＝楽園追放（「歩行不可能性」の喪失）☛【引用 8】
→歩行能力の獲得（歩行不可能性＝楽園にとどまる資格の喪失）＝認識能力の獲得
〔比較〕認識の木の実を食べたアダムとイヴの楽園追放
 - ・「地上の楽園」モールバック（☛【引用 9】）からの「追放」：ストックホルム行き
「古いモールバック」の自己破壊
 - ▶放浪する「脚部障害者」としてのセルマ・ラーゲルレーヴ
〔比較〕「腿に傷を持つ」ヤコブ＝イスラエルの民の放浪の運命☛引用集）B. 参考資料

【発表者連絡先】

メールアドレス：nakamart@rs.tus.ac.jp

ホームページ：http://www7b.biglobe.ne.jp/~nakamaru_teiko/index.html

（「業績」欄から、これまでに発表した雑誌掲載論文（PDFファイル）がダウンロードできます）

【参考文献】

〈ラーゲルレーヴ作品〉

- *Gösta Berlings saga* Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1891
 - *Gösta Berling. Roman.* übers. v. Pauline Klaiber-Gottschau. (Vollständige Ausgabe Juli 1962) 12 Aufl. München (Deutschen Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG) 2001 (初版 1903)
 - *Die Geschichte von Gösta Berling.* übers. v. Paul Berf. München (Piper Nordiska) 2007
- *Mårbacka*, Stockholm (Albert Bonniers Förlag) 1922
 - Selma Lagerlöf: *Mårbacka. Erinnerung an meine Kindheit*, München (Langen Müller Verlag) 2008
 - ラーゲルレーヴ『モールバックカ ニルスの故郷』、新妻ゆり訳、柏艚舎文芸シリーズ、2005

〈二次文献〉

- Bergenmar, Jenny: *Den politiska Selma Lagerlöfs*. I: Anna Nordlung (red) : *Selma Lagerlöf 1858-2008...*Stockholm (Kungliga Biblioteket) 2008, s.71-83
- Edström, Vivi: *Selma Lagerlöf. Livets vågspel*. Uddevalla (Natur och Kultur) 2002
- Keith, Lois: *Take Up Thy Bed and Walk: Death, Disability and Cure in Classic Fiction for Girls* (The Women's Press) 2001
 - キース、ロイス『クララは歩かなくてはいけないの？少女小説にみる死と障害と治癒』藤田真利子訳、明石書店、2003年
- Key, Ellen: *Barnets århundrade* (Albert Bonniers Förlag) 1900
 - ケイ、エレン『児童の世紀』小野寺信・小野寺百合子訳、富山房、1979年
- Wivel, Henrik: *Snedronningen*. København (G.E.C. Gads Forlag) 1988. (Wivel, Henrik: *Snödrottningen. En bok om Selma Lagerlöf och kärleken*.Översättning av Birgit Edlund. Uddevalla (Bonniers) 1990.
- 米本昌平ほか『優生学と人間社会』、講談社現代新書、2000年
- 『聖書 新共同訳』、日本聖書教会、1987年

〈インターネットサイト〉 (著作権の切れた北欧文学の原典が閲覧できます。『モールバックカ』も収録されています)

- Projekt Runeberg <http://runeberg.org/>

〈引用集〉

A. 『モールバック』より（【引用】の横にあるのは章のタイトル、引用文末の s. はスウェーデン語のページ、S. はドイツ語のページ、P. は新妻ゆり訳のページ。下線はすべて引用者。【引用 6】以外は、中丸訳の日本語引用文、スウェーデン語原文、ドイツ語訳の順）

【引用 1】（『モールバック』 s.15, S.15, P.9）

「お泣きにならないでくださいまし」と彼女は言いました。「私がお運びいたしますから」
すると、まるで幼子からすべての憂いが消えていったようでした。バック・カイサが運んでくれるのなら、自分で歩けないことなど、何でしょうか。誰もそれを彼女に言う必要はありませんでした。それにもかかわらず、彼女は、バック・カイサのような強くて立派な友達を持つ者には、うまくいかないことなどないということが分かっていました。

”Inte ska Selma gråta för då”, sade hon. ”Jag ska bära'na.”

Och därmed var det, som om hela sorgen skulle vara släckt för den lilla. Hon kände sig varken rädd eller olycklig mera. Vad gjorde det, att hon inte kunde gå själv, när Back-Kajsa ville bära henne? Ingen behövde säga henne det. Hon förstod ändå, att den, som hade en så stark och präktig vän som Back-Kajsa, den gick det ingen nöd på.

»Deshalb musst du nicht weinen, Selma«, sagte sie. »Ich werde dich tragen.«

Damit war der ganze Kummer der Kleinen wie weggeblasen. Nun fühlte sie sich nicht mehr verlassen und unglücklich. Was tat es, wenn sie sich nicht mehr gehen konnte, wenn Back-Kajsa sie tragen wollte? Das brauchte ihr niemand zu sagen, sie wusste es schon genau: wer einen so prächtigen, starken Freund hatte wie Back-Kajsa, dem konnte es nicht schlecht gehen.

【引用 2】（『モールバック』 s. 44, S. 46-47, P. 49）

しかし、鳥はどこにもいなかったもので、近くに立っていたストレームベルイ船長のキャビンボーイに向かって、彼女は楽園の鳥はどこにいるのかと尋ねました。

「一緒においでよ、そうすればみられるから」、と彼は言いました。彼女が船倉に落ちてしまわないように、彼は彼女に手を差し伸べました。そして彼は、彼女の前を、後ろ向きになってキャビンのトラップを降りていき、(a)彼女は彼に続きました。

キャビンはとてもきれいでした。家具も壁も、ぴかぴか光るマホガニーで、そして、そこに、本当に楽園の鳥がいたのです。

それは、彼女が考えていたよりもずっと、すばらしいものでした。生きてはいませんでした、テーブルの真ん中に立って、美しい羽がすべてそろっていました。

彼女は椅子によじ登り、そこから机に登りました。そして、楽園の鳥の傍らに座って美しさに見とれました。キャビンボーイは傍らに立って、長く、光り輝く、垂れた羽を彼女に見せました。そして、彼は言いました。(b)「見なよ、楽園から来たみたいだろ。脚がないんだ。」

(c)楽園では歩く必要はなく、ただ二枚の翼があれば良いのだ、という彼女の想像に、これはぴったりでした。彼女は大きな信心を持ってこの鳥を眺めました。彼女は夕暮れのお祈りをする時とちょうど同じように、手を組みました。(d)彼女はキャビンボーイが、この鳥がストレームベルイ船長を守っていることを知っているのか、とても気になりましたが、聞いてみようとはしませんでした。

Men när ingen fågel syntes, vände hon sig till kaptan Strömbergs kajutpojke, som stod i närheten, och frågade var paradisfågeln fanns.

”Kom med, så ska du få se honom,” sade han. Han räckte henne handen, för att hon inte skulle falla ner i lastrummet. Sedan gick han baklänges före henne utför kajuttrappan, och hon följde honom.

Nere i kajutan var det mycket fint. Det blänkte av mahogny både på möbler och väggar, och där fanns verkligen paradisfågeln.

Den var ändå underbarare, än hon hade tänkt sig. Den var inte levande, men stod där ändå mitt på ett bord, hel och fin med alla sina fjädrar.

Hon klättrade upp på en stol och från den upp på bordet. Och där satte hon sig bredvid paradisfågeln och beskådade dess skönhet. Kajutvakten stod bredvid och visade henne de långa, ljusa, hängande fjädrarna. Sedan anmärkte han: ”Se, det syns, att han är från paradiset. Han har inga fötter.”

Det passade mycket väl in i hennes föreställningar om paradiset, att man inte behövde gå där, utan kunde reda sig endast med ett par vingar, och hon betraktade fågeln med stor andakt. Hon knäppte sina händer, liksom när hon skulle läsa sina böner om kvällarna. Hon undrade mycket om kajutpojken visste, att det var fågeln, som skyddade kapten Strömberg, men hon tordes inte fråga.

Aber als kein Vogel zu erblicken war, wandte sie sich an Kapitän Bergströms Kajütenjungen, der in der Nähe stand, und fragte ihn, wo denn der Paradiesvogel sei.

»Komm mit, dann darfst du ihn sehen«, sagte der Junge. Er reichte ihr die Hand, damit sie nicht in den Laderaum hinabstürze. Dann ging er rückwärts nach der Kajütentreppe, und sie folgte ihm.

Unten in der Kajüte war es riesig fein. Möbel und Wände ringsum waren aus glänzendem Mahagoni, und da war auch richtig der Paradiesvogel.

O dieser Vogel! Er war noch wunderbarer, als Selma sich's hatte träumen lassen. Er lebte zwar nicht, stand aber doch in ganzer Größe und Pracht mit allen seinen Federn vor ihr.

Sie kletterte auf einen Stuhl und von diesem auf den Tisch. Und da setzte sie sich neben den Paradiesvogel und betrachtete seine Schönheit. Der Kajütjunge stand daneben und zeigte ihr die langen, glänzenden, hängenden Federn. Dann bemerkte er: »Siehst du, man könnte meinen, er käme aus dem Paradies. Er hat gar keine Füße.«

Das passte sehr gut in die Vorstellung des Kindes vom Paradies, dass man dort nicht gehen müsse, sondern sich mit zwei Flügeln fortbewege, und sie betrachtete den Vogel in tiefer Andacht. Dan faltete sie die Hände, wie wenn sie ihr Abendgebet sprechen wollte. Alsdann überlegte sie, ob der Kajütenjunge wohl wisse, dass es der Vogel sei, der den Kapitän Bergström beschützte. Aber sie wagte nicht zu fragen.

【引用 3】（『モールバック』 s.48, S.51, P.54）

セルマはお祖母様のところに連れて行かれ、歩けるのを見せました。後に、エストラ・エムテルヴィー区の教会に座って栞（引用者註：ストレームスタッドで姉アンナと親しくなった少女がセルマにくれた「思い出」と書かれた赤い栞。バック・カイサの勧めにより、讚美歌集に挟んでいた）の上にかがんで、彼女は思いました、ストレームスタッドの旅行中に、彼女は歩くことを学んだだけではないのだと。彼女は見ることも学んだのでした。

彼らが、自分の近くにいる皆が、力に満ちた日々を過ごし人生を楽しんでいる間、どのように見えるかということを知ったのは、旅行のおかげでした。旅行がなければ、この時代のすべてのことは、彼女の記憶から消えてしまったことでしょう。

Hon fördes fram till farmor och fick visa, att hon kunde gå. Sedermera, då hon i Östra Ämterviks kyrka satt böjd över bokmärket, tänkte hon, att hon inte bara hade lärt att gå under Strömstadsresan. Hon hade också fått lära att se.

Det var tack vare den resan, som hon visste hur de sågo ut, alla hennes närmaste, medan de voro i sin krafts dagar och glädde sig åt livet. Hade den inte varit, skulle allt från den tiden ha varit utplånat ur hennes minne.

Sie wurde zur Großmutter hingeführt und musste zeigen, dass sie jetzt gehen konnte. Später, wenn sie in der Kirche von Ost-Ämetervik über das Buchzeichen gebeugt dasaß', wurde ihr eines klar: während der Reise nach Strömstadt hatte sie nicht nur gehen, sondern auch sehen gelernt.

Dank der Reise wusste sie nun, wie alle ihre Lieben aussahen, zu der Zeit, wo sie noch in der Blüte ihrer Jahre standen und sich ihres Lebens freuten. Wäre die Reise nicht gewesen, so wäre aus jener Zeit ihrem Gedächtnis entschwunden.

【引用 4】(『モールバック』 s.16, S.16, P.10)

「どうやってこのかわいそうな子は人生を送るのだろうか」と皆は言いました。「世の中のものを見る 4 ことはできずに、一つの場所にじっと座っていることになる。結婚もできないし、一人で身を立てることもできないだろう。何をすることも難しいだろうね。」

„Hur ska den stackarn komma genom livet?“ sade de. ”Inte får hon se något av världen, utan det blir att sitta stilla på en och samma fläck. Inte blir hon gift, och inte kan hon försörja sig. Hon får det allt bra svårt.”

»Wie soll das arme Wurm durchs Leben kommen?«, sagte sie. »Von der Welt bekommt es nie etwas zu sehen, es muss immer still auf einem Flech sitzen. Heiraten kann es nicht und selber für sich sorgen ebensowenig. Es ist wirklich hart für die Kleine.«

【引用 5】(『モールバック』 s.44, S.47, P.50)

彼らは、なんと幸せになったことでしょう！今や、旅行の目的は達成され、お金をかけた企ては無駄にはなりません。小さな子どもは、打ち捨てられた不幸な片輪者(*)になるのではなく、本当の人間になるのです。 (*引用者註：krympling の訳として、作品のニュアンスを正確に表現するため、あえて差別的な語を使用する。

Vad de blevo glada och lyckliga! Nu var ju avsikten med resan uppfylld, det dyra företaget hade inte varit förgäves. Det lilla barnet skulle inte bli en hjälplös, olycklig krympling, utan en riktig människa.

Ach, was war das für ein Glück! Nun war der Zweck der Reise erreicht, das kostspielige Unternehmen war nicht vergeblich gewesen! Das Kind würde kein hilfloser, unglücklicher Krüppel bleiben, sondern ein richtiger Mensch werden.

【引用 6】()内は正書法での表記。文頭の「」内は章タイトル

〈バック・カイサの台詞〉

「乳母」 ”Va ä dä mä Selma? Ä hon sjuk?“ (Vad är det med Selma? Är hon sjuk?) s. 14

〈漁師の台詞〉

「思い出」 ”Dä ä roligt, löjtnanten, å se, att den lilla flicka nu står på däcket breve di andra barna“ (Det är roligt, löjtnanten, och se, att den lilla flicka nu står på däcket bredvid de andra barna) s. 46

〈叔母の台詞〉

「珍しいお客様」 ”Ser du, det här är en liten syster, som har kommit till dig i natt.” s.20

〈母の台詞〉

「ウッデホルム号のキャビンで」 ”Jag måste se efter om barna kan hålla sig kvar på hyllorna”

〈セルマの台詞〉

「乳母」 Kom å ta mej, Back-Kajsa” (Komm och tag mig, Back-Kajsa) s.14

「珍しいお客様」 ”Ä di där inne?” (Är de där inne?) s.20

「カールスタッドへの旅」 ”Ä inte Back-Kajsa glad å vara ensam mä mej?” (Är inte Back-Kajsa glad och vara ensam med mig?) s.23

「楽園の鳥」 ”Vad är det?” s.40

※är (口語では ä) や mig(mej), dig(dej),sig(sej)の表記に注目すると変遷が分かりやすい。

※※ ただし、säjer (正書法では säger) のみ、全員が口語表記で書かれている。

【引用 7】 (『モールバック』 s.40-41, S.43, P.44)

彼女は本当にその鳥に会いたいと思いました。その鳥は、きっと彼女を助けてくれることができるでしょう。すべての人間が今、彼女のお父さんとお母さんは気の毒だ、彼女が元気にならないのだから、と思っていました。彼らが彼女のためにお金を払った、とても高価な旅行だったのです!

Hon ville verkligen bra gärna råka den där fågeln. Den skulle kanske kunna hjälpa henne. Alla människor tyckte ju, att det var så synd om hennes pappa och mamma, därför att hon inte blev frisk. En så dyr resa, som de hade kostat på sig för hennes skull!

Diesen Vogel wollte Selma wirklich gern sehen. Vielleicht konnte er auch ihr helfen. Alle Leute bedauerten ihren Vater und ihre Mutter, weil sie ein krankes Kind hatten. Und diese teure Reise war auch nur ihretwegen unternommen worden.

【引用 8】 (『モールバック』 s.45,S.48,P.50)

小さな少女は、自分の考えを持っていました。彼女は、楽園の鳥が本当に彼女を助けてくれたのではないかと強く思いました。足が必要ない国からやってきて、彼女にこの地上を歩くことを、それがとても重要なことであるこの地上で教えてくれたのは、羽ばたく翼を持った小さな奇跡だったのではないのでしょうか?

Den lilla flickan hade sina tankar för sig. Hon undrade mycket om paradisfågeln verkligen hade hjälpt henne. Var det det lilla undret med de dallrande vingarna, som hade kommit från landet, där man inga fötter behövde, som hade lärt henne gå här på denna jord, där det var en så högst nödvändig sak?

Das kleine Mädchen aber hatte seine eigenen Gedanken. Sie fragte sich, ob es wirklich der Paradiesvogel sei, der ihr geholfen habe. War es das kleine Wunder mir den wehenden Schwingen, das aus dem Lande gekommen war, in dem man keiner Füße bedurfte, das sie gelehrt hatte, auf dieser Erde zu gehen, wo Füße doch etwas so sehr Notwendiges waren?

【引用 9】(『モールバック』 s.241, S.264, P.279)

「親愛なる兄弟エリック・グスタフ、なぜ我々はこのあなたのところに来て、我々が運命と和解し、われらの国を誇り、我々自身とわれらを取り巻く全てのものを喜んでいと感じてしまうのでしょうか？あなたは偉大でたぐいまれなる者ではありません。あなたはたぐいまれなることはなにも成し遂げていないのです。しかしあなたは大きい善意と開かれた両腕を持っています。あなたが、可能であれば我々と世界の全てを大きな抱擁の中に抱こうとしていることを、我々は知っているのです。

「だからこそあなたは毎年、幾時間かの間、我々に、小さな至福と、小さな樂園と、ここエストラ・エムテルヴィークの言葉で我々が「8月17日」と呼ぶ小さなものを贈ることができるのです。」

”Kära bror Erik Gustav, hur kommer det sig, att vi måste fara hit till dig för att känna oss försonade med vårt öde, stolta över vårt land, lyckliga över oss själva och över alla, som omger oss? Du är ingen stor och märkvärdig man. Du har inte utfört några märkvärdiga ting. Men du äger den stora välviljan, den öppna famnen. Vi vet, att om du förmådde, skulle du vilja omfatta oss och hela världen i ett stort famntag.

”Därför är det, som det varje år lyckas dig att för några timmar skänka oss litet salighet, litet paradys, litet av detta, som vi på vårt språk här i Östra Ämtervik kallar *den sjuttonde augusti*.”

Woher kommt es nur, lieber Bruder Erik Gustav, dass wir Jahr um Jahr hierherkommen müssen, um uns ausgesöhnt zu fühlen mit unserer Schicksal, dass wir stolz sind auf unser Vaterland, glücklich über uns selbst und alle, die bei uns sind? Du bist kein großer, bedeutender Mann. Du hast keine großartigen Taten vollbracht. Aber in dir wohnt das große Wohlwollen, das offene Herz. Wir wissen, wenn du es vermöchtest, würdest du uns und die ganze Welt umfassen in einer einzigen großen Umarmung.

Deshalb gelingt es dir, uns jedes Jahr einige Stunden Seligkeit zu schenken, ein kleines Paradies, ein wenig von dem, was wir hier in Ost-Ämtervik in unserer Sprache *den siebzehnten August* nennen.

B. 参考資料：聖書

中風の人をいやす

イエスは船に乗って湖を渡り、自分の町に帰って来られた。すると、人々が中風の人を床に寝かせたまま、イエスのところへ連れて来た。イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」と言われた。ところが、律法学者の中に、「この男は神を冒瀆している」と思う者がいた。イエスは、彼らの考えを見抜いて言われた。「なぜ、心の中で悪いことを考えているのか。『あなたの罪は赦される』というのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に、「起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい」と言われた。群衆はこれを見て恐ろしくなり、人間にこれほどの権威をゆだねられた神を賛美した。

(「マタイによる福音書」9。同内容：「マルコによる福音書」2、「ルカによる福音書」5)

創世記：ヤコブとエサウの誕生

主は彼女に言われた。

「二つの国民があなたの胎内に宿っており
二つの民があなたの腹の中で分かれ争っている
一つの民が他の民より強くなり
兄が弟に仕えるようになる。」

月が満ちて出産の時が来ると、胎内にはまさしく双子がいた。先に出てきた子は赤くて、全身が毛皮の衣のようであったので、エサウと名付けた。そのあとで弟が出てきたが、その手がエサウのかかと（アケ

ブ)をつかんでいたのので、ヤコブと名付けた。(「創世記」25-23~26)

創世記：悔しがるエサウ

エサウは叫んだ。

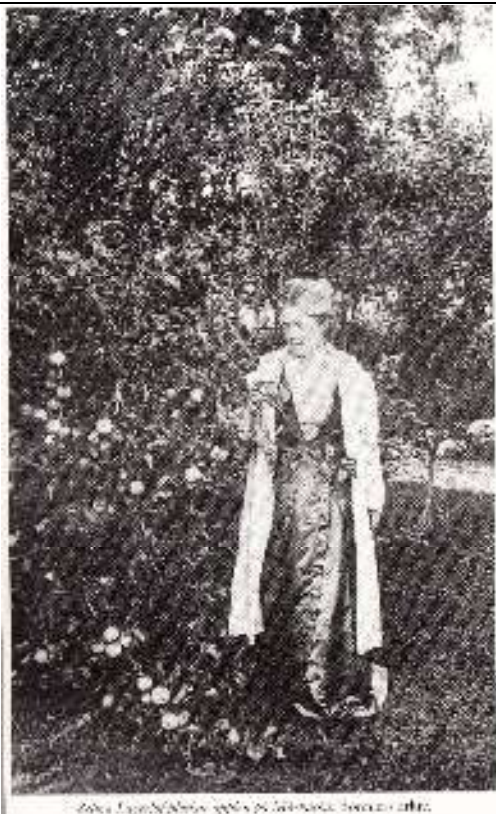
「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り(アーカブ)欺いた。あのときはわたしの長子の権利を奪い、今度はわたしの祝福を奪ってしまった。」(「創世記」27-36)

創世記：ペヌエルでの格闘

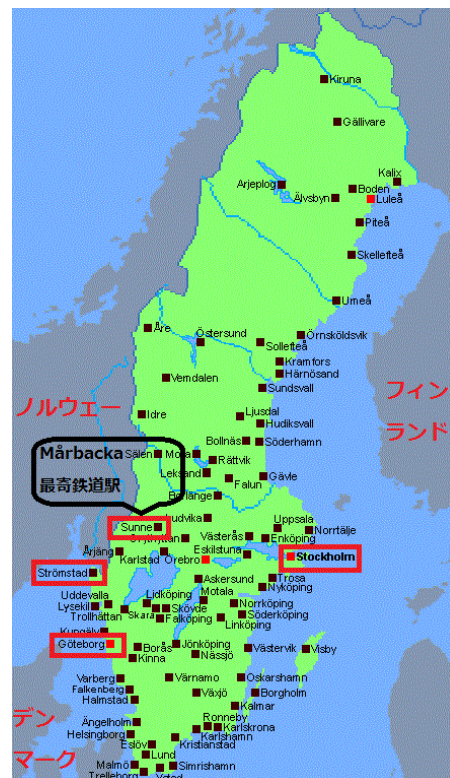
ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」「お前の名は何というのか」とその人が訪ね、「ヤコブです」と答えると、その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。ヤコブは、「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をペヌエル(神の顔)と名付けた。

ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引きずっていた。こういうわけで、イスラエルの人々は今でも腿の関節の上にある腰の筋を食べない。かの人々がヤコブの腿の関節、つまり腰の筋のところを打ったからである。(「創世記」32-25~33)

〈画像資料〉



①モールバックの果樹園にいるラーゲルレーヴ



②スウェーデンの地図



Lagerlöf med sina fem barn år 1872. Från högers sida: Daniel, en son, en dotter, en son och Gerda på det Mölbackarsamlingen, KTH.

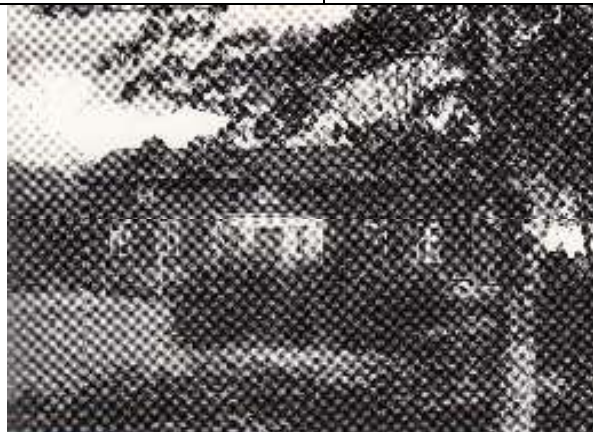
③ラーゲルレーヴの母と兄弟姉妹。後列一番左がセルマ。1872年撮影。



④父グスタフ・ラーゲルレーヴ



⑤乳母バック・カイサ



⑥「古いモールバック」。セルマの叔父 K. ヴァルロート画。



⑦現在のモールバック



⑧ラーゲルレーヴがはいていた、左右の高さ・大きさが違う靴



⑨バック・カイサの家があった丘から望むモールバック。



⑩ソフィー・エルカンとラーゲルレーヴ。1913年撮影。ラーゲルレーヴはモールバックにエルカンの部屋を作ったが、エルカンは完成を見ないまま1921年に世を去った。



⑩モールバックで飼育されている孔雀。「楽園の鳥」として、ラーゲルレーヴの生前から飼われていた。

【画像引用元】

①③④⑥ Vivi Edström: *Selma Lagerlöf. Livets vågspel*. Uddevalla (Natur och Kultur) 2002. 口絵

② <http://www.ludd.luth.se/~vk/pics/misc/MISC.HTML> (2011年10月8日閲覧)

⑤ <http://www.naturverk.com/Backkajsa/backtorp.html>

⑦⑨⑩ 2007年8月11日モールバックにて中丸撮影

⑧モールバックのラーゲルレーヴ博物館所蔵。2008年4月23日ストックホルム郵便博物館にて中丸撮影

⑪ イェーテボリ市立美術館の絵葉書